

Ⅱ－２（３）ローカルフードシステムのオルタナティブ性

伊賀 聖屋

1. はじめに

現代の食の領域では、合理的・効率的な食料供給の実現に向け、食料生産・流通様式の工業化が推進されてきた。これにより、腐敗性・季節性などの食固有の自然的要素や、気候・天候といった自然環境が食料供給過程へと及ぼす影響が最小化され、食料の長距離輸送や通年供給が可能となった。ところが、そのような食の工業化やそれに伴うフードシステムの空間的伸長は、食の安全や環境負荷、不公正な経済取引に関する問題を人間社会へともたらしてきた。

このような中、日本を始めとする先進諸国では、地産地消や産消提携、CSA(Community Supported Agriculture)のように「特定場所の地理的環境と結びつく度合いの強い食料供給体系」(以下、ローカルフードシステム(LFS))の再評価・構築がなされてきた。このLFSは、工業化・広域化した食料供給体系では非合理的なものとして排除されがちな自然的要素や人々の近接関係が重視されるという点でほぼ共通している。それゆえ、LFSは工業化・広域化した食料供給体系に対するオルタナティブとして位置づけられ(たとえば、Leyshon et al. 2003)、その構築を食の工業化・グローバル化に対応できない/しない人々や地域の生存戦略へと結びつけるような学問的・政策的動きや社会運動も加速している。

ここで注目したいのは、「LFSの具体的にどのような構造的特質(=食料供給体系の性格)が従来型の食料供給体系に対するオルタナティブ性を規定しているのか」という点である。一般的に、LFSの構築を推進する趨勢は、あらゆるLFSを無批判的に捉え、専らそれを支配的食料供給体系に対するオルタナティブとして理想化する傾向にある(Holloway et al. 2007)。しかし、後述するように、LFSは介在主体間の関係の質や規模の面で多様な形態をとりうるものであり、そのもつオルタナティブ性の度合いは体系ごとに異なることが予想される。それゆえ、LFSの構築を地域活性化・農村開発戦略へと組み込むことの可能性を考える上では、LFS間の差異に着目しながら、どのようなタイプのLFSがいかなる機能を果たしているのかを体系的に理解することが肝要といえる。

2. LFSのオルタナティブ性をめぐる議論

国内外の地理学・社会学では、工業化・広域化に伴う「食の再ローカル化」を背景として、主に90年代後半以降、LFSの出現背景や機能を解釈するための理論的枠組みの構築やそれに基づく実証研究の蓄積がなされてきた。しかしながら、初期の研究の多くは、LFSを主流のものとは異なる食料供給体系として捉え、「それが何であるか(=それがどのような特徴を有するのか)」ということよりもむしろ、「それが何でないか(=それが支配的な食料

供給体系に固有の特質を有さない」という点から定義づけてきた(Tregear 2011)。それゆえ、LFS のどのような特質がそのオルタナティブ性を規定しているのかについての合意が欠如してきた。

そのような中、2000 年代以降、LFS の構造的特質に着目しながらそのオルタナティブ性を問うような研究が徐々に蓄積されるようになった。基本的にそれらの研究は、LFS と支配的食料供給体系との二元論的な関係を前提としており、異なる二つの食料供給体系の構造的特質を特徴づけるために「自然的・社会的・空間的埋め込み」概念¹⁾を援用してきた。具体的には、支配的食料供給体系を「脱埋め込みされたもの」(すなわち、特定の場所の地理的環境から切り離されているもの)、LFS を「(再)埋め込みされたもの」(すなわち、場所の地理的環境と密接に結びつけられているもの)としてそれぞれ位置づけてきた。そして、とりわけ社会的・空間的に埋め込まれた人々の行為を基盤として形成される「短絡化された関係(≡主体間の社会的・空間的近接関係)」を LFS 構造的特質の一つに位置づけ、その有無を基準に食料供給体系を「オルタナティブなもの」と「コンベンショナルなもの」とに分類してきた。

しかしながら、このような二分論的なアプローチは、LFS の動態を十分に捉えきれていない。二分法的な視点は、LFS の構造的特質の一つである介在主体間の「短絡化された関係」を所与のものとして扱い、その複雑さや差異を捨象してしまう可能性があるためである。現実には、Watts et al. (2005)が指摘するように、一見同様の主体間関係にも「オルタナティブの度合いの強いもの *alternative food network*」や「オルタナティブの度合いの弱いもの *alternative food network*」といった異なるタイプのものが存在している。さらに、LFS にしろ支配的な食料供給体系にしろ、「オルタナティブ/コンベンショナル」、「グローバル/ローカル」といった人為的な境界線で分け隔てられた領域の中で完全に独立して機能するということは滅多にない²⁾。要するに、現代の食料供給体系は、理念的にはオルタナティブとコンベンショナルを両極とする連続体のいずれかに位置しており、これまで一括してオルタナティブと形容されてきた LFS もその連続体の異なる地点にそれぞれ位置しているといえる。それゆえ、一見同様の LFS 同士でも「短絡化された関係」の内実は異なり、各 LFS が帯びるオルタナティブ性の度合いも異なる。

したがって、LFS の理解に向けて重要なことは、一見同様の LFS を「オルタナティブなもの」として単純に分類することを回避し、LFS 間で異なるであろう「短絡化された関係」の質に目を向けることである。その際、「短絡化された関係」を構成する諸要素(たとえば、①主体間の相互作用、②主体間関係の管理様式、③関係形成に関わる主体の動機)³⁾の組み合わせが、関係の質や主体にもたらす影響に差異を生み出し、さらには LFS のオルタナティブの度合いの規定する、との認識をもつことが肝要といえる。

3. LFS の規模をめぐる議論

ところで、これまでの LFS 研究においては、支配的な食料供給体系と比した場合の LFS

の小規模性(たとえば、介在主体数や生産量)も、LFS と他の食料供給体系との区別をなす重要な指標として用いられてきた。確かに小規模な食料供給体系が良質食品市場への参入や短絡化された関係の構築を志向する傾向は相対的には強いかもしれない。しかし近年は、特定の食料を供給する LFS の中でも、「介在主体数、生産量、核となる主体の市場における位置の面で相対的に規模の大きなもの」(以下、大規模 LFS)も出現しつつある。この大規模化した LFS では、内実は定かではないものの、「特定産地との原料農産物の契約栽培」や「消費者への直接販売」といった主体間の「短絡化された関係」が構築されており、一見しただけでは小規模な LFS との差異が不明瞭な場合がある。

ここでの両者の差異は、単なる事業規模の違いだけなのであろうか。おそらくそれは、先の「短絡化された関係」の質とも関連していると考えられる。つまり、「短絡化された関係」を構成する要素(①主体間の相互作用、②主体間関係の管理様式、③関係形成に関わる主体の動機)によって、両者の差異は規定されているものと推察される¹⁾。それゆえ、現実世界の多様な LFS を理解する上では、LFS の規模にも目配りを利かせながら、その「短絡化された関係」の質を検討していく必要もある。

4. さいごに

筆者は今後、規模の異なる複数の LFS を相互に比較することで、各 LFS における「短絡化された関係」の質やそれが介在主体に及ぼす影響について鮮明化させていきたいと考えている。具体的には、石川県能登地方に位置する複数の LFS を事例として、①LFS における短絡化された関係がいかなる要素から構成されどのような特質を呈しているのか、②その「短絡化された関係」が介在主体にとっていかなる機能を果たしうるのかといった諸点について明らかにしていきたい。

これらの作業は、どのような規模・特質の LFS がいかなる場面においてどのようなパフォーマンスを発揮しうるのかといった、LFS のオルタナティブ性や発展性を体系的に理解するための一助となろう。またそれは、LFS の市場競争力の適正な評価やより強固な LFS の形成条件の導出にもつながろう。

注

1) 自然的脱埋め込みとは、食固有の有機的要素(季節性、腐敗性など)や食料生産を取り巻く自然環境(気候、地形など)が食料供給プロセスに与える影響を弱めることを指す。自然的脱埋め込みの進んだ食料供給プロセスにおいては、供給体系の広域化・安定化を図る上で制約となる自然的要素が科学技術などを通じて収奪される。空間的脱埋め込みは、食料供給プロセスが、特定の場所や空間と結びつく度合いを弱体化させることである。空間的脱埋め込みの進んだ供給体系においては、より広域的、流動的な空間の中で主体(生産者～消費者)間の関係が再編されるようになる。社会的脱埋め込みは、食料供給プロセスが、信念、価値、習慣、規範などを共有する人々の社会関係から影響を受ける度合いを低下させることである。一般に、社会

的に埋め込まれた食料供給プロセスでは、主体間の経済取引が特定のコミュニティで共有された道徳的な基準（非経済的動機）によって制限される度合いが強い。しかし、社会的に脱埋め込みされた食料供給体系では、非個人的かつ短期的な経済取引が卓越し、各主体が自己の利益の最大化を目的に合理的行動をとる度合いが強くなる（Sage 2003；渡辺 2008）。

- 2) たとえば、Ilbery and Maye (2005)では、スコットランドの食料供給者がLFSとコンベンショナルFSの双方へと同時に関係しているということが指摘されている。
- 3) ①の「主体間の社会的相互作用」は、LFSに介在する主体間の接触の頻度や内容(=フォーマルな接触/インフォーマルな接触、対面接触/距離を隔てての接触などの総体)のことである。一般に、この社会的相互作用は、LFSに介在する主体間の関係を生成・改変するといわれている。②の「主体間関係の管理様式」は、LFSにおける主体間関係を維持・再生産するための仕組みである。具体的にそれは、関係の再生産に向けて行われる主体間での影響力の行使(Maye et al. 2007)であり、「短絡化された関係」の質(たとえば、垂直的ネットワークや水平的ネットワーク)をも大きく左右すると考えられる。③の「関係形成に関わる主体の動機」は、介在主体がLFSに参加する目的や戦略的意図のことである。一般に、①の「主体間の社会的相互作用」のあり様や②の「主体間関係の管理様式」は、主体の環境解釈やそれに伴う判断に依拠するといわれている。したがって、主体の目的・戦略的意図もLFSの「短絡化された関係」に少なからず影響を及ぼす要素として位置づけられる。
- 4) たとえば、大規模LFSにおいては、多数の介在主体の行為を調整する何らかの仕組みや製品を効率的に配分するシステムの構築も要されるであろう。

文献

- 渡辺 深 (2008) 「新しい経済社会学の概念枠組」、渡辺 深編『新しい経済社会学』、上智大学出版、1-35頁。
- Ilbery, B. and Maye, D. (2005) Alternative (shorter) food supply chains and specialist livestock products in the Scottish-English borders. *Environment and Planning A*: 823-844.
- Leyshon, A., R. Lee, et al., Eds. (2003). *Alternative Economic Geographies*. London, Sage.
- Maye, D., Holloway, L. and Kneafsey, M. (2008) “Alternative food geographies: representation and practice”, Elsevier Science Publishing Company.
- Sage, C. (2003) “Social embeddedness and relations of regard: alternative ‘good food’ networks in south-west Ireland”, *Journal of Rural Studies* 19: 47-60.
- Tregear, A. (2011) Progressing knowledge in alternative and local food networks: critical reflections and a research agenda. *Journal of Rural Studies*
- Watts, D., Ilbery, B. and Maye, D. (2005) Making reconnections in agro-food geography: alternative systems of food provision. *Progress in Human Geography* 29: 22-40.